

博士論文

論文要旨

日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略と重訳の影響

一橋大学言語社会研究科

指導教員 糟谷啓介先生
副指導教員 イ・ヨンスク先生

ガラハーニー ファテメ
Gharakhani Fatemeh

LD121005

本論文は日本語のテキストから英語訳を通してペルシア語に翻訳された文（すなわち重訳された文）における翻訳方略と重訳の影響の分析ならびに解明を目的とした記述的な研究の報告である。

まず、第 1 章では本研究の背景と目的及び研究方法を紹介し論文の価値と独自性を述べる。

第 2 章ではヴィネイとダルベルネの方略が生み出された等価論を論じたうえで、ヴェヌティの受容化翻訳と異質化翻訳を概観する。次に本研究の分析基準であるヴィネイとダルベルネによる七つの翻訳理論ならびに翻訳方略に言及する。また、テキストのメッセージ伝達に使用されるデノテーションとコノテーションという概念を紹介する。その後、イランにおける翻訳ならびに重訳の歴史に焦点を当て、日本とイランの交流歴史、また両国の通訳者によって使用された言語について検証する。こうして得た知見に基づき、翻訳の文学への影響及びペルシア語における言語の変更に関して述べる。また、岡田の講演記録を参照し、その視点からのペルシア語及び日本語の間、特にペルシア語から日本語における翻訳の問題点について述べる。これに加えて、日本語からペルシア語、ペルシア語から日本語への翻訳の際に最も使用され、翻訳に多大な影響を与えるペルシア語・日本語、日本語・ペルシア語現代ペルシア語辞典における問題点について説明する。最後に本研究において非常に重要な役割を果たす重訳の定義、またそれに対する様々な見解を概観する。

第 3 章においては、諸言語間翻訳における異文化に関する問題点を論ずる先行研究として、ポーランド語・英語や英語・ペルシア語、ペルシア語・フランス語間における文化要因の翻訳方略に関して行われた考察、またこれらの考察に見られる翻訳に対する批判、対照・比較に焦点を当てた研究を紹介する。また、日本語・英語そして英語・ペルシア語間における翻訳書全体を対象に、受容化・異質化の観点から考察された比較・対照に関する研究ならびに考察を取り上げる。これに加えて、限られた数ではあるが、重訳にかかわる研究の一部を紹介する。最後に日本語とペルシア語間の翻訳についての現状を報告したうえで、こうした状況下における本研究の必要性について述べる。

第 4 章では本研究の分析対象である川端康成の『掌の小説』ならびに、吉本ばなの『ハードボイルド/ハードラック』について、文化的な要因が数多く含まれており、翻訳に問題が生じる可能性がある文学作品であるとの選定理由を紹介する。次に本研

究で採用する分析基準及び分析方法を詳しく説明する。続いて、日本語・英語及び英語・ペルシア語のテキストを個別に対照し、分類したそれぞれのカテゴリーにおける受容化翻訳と異質化翻訳が実際にはどのように行われたのか、ならびにデノテーションとコノテーションとの伝達の可否を調べる。こうして得られた分析結果に基づいて、重訳が日本語・ペルシア語間翻訳における翻訳方略にどのような影響を及ぼしているのかを調査する。さらに、重訳の対象と同一の日本語文を筆者が直接ペルシア語に翻訳し、得られたペルシア語訳文を、英語を経たペルシア語訳文と比較検討する。

続いて、第 5 章では第 4 章で示した分析方法に基づいた分析の結果を、1. 擬音語・擬態語、2. 色彩語彙、3. 社会言語学的次元の言葉（挨拶表現、呼称、一人称代名詞・二人称代名詞、尊敬語・謙譲語）、4. 異文化要素、5. 著者の特有表現の五つのカテゴリーにまとめ、各カテゴリー別に日本語とその英語訳、また英語から翻訳されたペルシア語のテキストから具体例を挙げながら使用される翻訳方略を分析し、受容化翻訳と異質化翻訳方略という観点から考察する。この分析結果を図示し、デノテーションとコノテーションの伝達、言い換えれば重訳の影響を探る。また、筆者が日本語から直接翻訳したペルシア語訳文を、英訳を経たペルシア語訳文と比較し、重訳によって捨象された要素と保持された要素とを調べる。

最後に、第 6 章では本研究の結論を以下のようにまとめる。上記の分析をまとめると、日本語 (SL) から英語 (EL) への翻訳および英語 (EL) からペルシア語 (PL) への翻訳における方略がいずれも受容化であったカテゴリーは全 77 件中 74 例文であり、そこには擬音語・擬態語、色彩語彙、挨拶表現、一人称代名詞・二人称代名詞及び敬語表現に関する例文が含まれる。SL から EL への翻訳方略が受容化方略であるのに対して、EL から PL の翻訳には受容化と異質化を組み合わせた方略が用いられたのは 2 例文と少なかったが、これらの例文は文化要因並びに著者の特有表現に関わるものであった。SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略はいずれも受容化及び異質化の組み合わせであるのも 1 例文と非常に少なく、その対象となる要素は呼称表現であった。要約すると、全例文中の約 96%において、SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳に受容化方略に至る間接的翻訳が使用されたことが判明した。また SL から EL への翻訳および EL から PL への翻訳における方略がいずれも受容化及び異質化の組み合わせであるケースも 1 例存在した。いっぽう、SL から PL への翻訳および EL から PL への翻訳方略は 77 例文中 75 例文において同一であることがわかった。すなわち、受容化方略及び異質化方略に繋がる間接的翻訳と直接的翻訳の

二つの全体的な翻訳方略観点からみると、SL から EL への翻訳及び EL から PL への翻訳方略の間に特に差が見られなかった。ただし、局所的な観点からみると、SL から EL への翻訳及び EL から PL への翻訳のいずれにおいても最も使用された翻訳方略は等価方略であった。

「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」のどちらが用いられたかは、デノテーションまたはコノテーションの伝達への影響はみられなかった。「異質化方略」に繋がる「直接的翻訳」、または「受容化方略」に及ぶ「間接的翻訳」はどちらも等価な訳出を生み出すために重要な方略であり、主に翻訳される起点言語及び目標言語の体系、また翻訳者の用いる手法によって異なる。翻訳方略以外に、各カテゴリーにおいて文意のニュアンスが伝達されなかった理由は、重訳によって生じた様々な問題であった。たとえば、SL から EL に翻訳された際、文化の差異によって相当する訳語が存在しない場合は、SL における要素が省略または一般化され、あるいは配慮されなかった例が多かった。また、誤解が生じたケースも少なくなった。特に、擬音語・擬態語、一・二人称代名詞ならびに文化要素における翻訳においては省略や一般化または暗示化がなされた。これに加えて、敬語表現においてはさらなる誤解も生じたことがあった。文化の違いに起因して文意のニュアンスの伝達に支障が起こった例は、色彩語彙、挨拶表現、敬語表現、文化要素及び著者の特有表現のカテゴリーにおいて多くみられた。例えば、色彩語彙については、各文化圏において対応する色の認識やカバーされる色の範囲も異なるため、そのニュアンスが伝達されにくい。また挨拶表現の重訳においては、文化が日本語とは大きく異なる英語では敬意や親愛の意を示す挨拶表現などはあまり存在しないため、翻訳にそのニュアンスが捨象された結果、PL にも伝達されないという現象が見られた。異文化要素は文化に関連している記号であるため、SL における語彙に対応する訳語が EL や PL に存在しない場合が多く、省略または一般化される、あるいは正確な訳出よりもその分類、または似ているものに翻訳されることによって、含意が伝達されない。呼称の翻訳の際には、親族以外の呼称、または英語圏と異なる場面において使用された呼称の翻訳はすべて文意伝達に支障が生じた。

筆者が直接 SL を PL に翻訳した際には、まず重訳を経たことによって生じる省略または誤解の問題を避けることができた。さらに、日本とイランにおける文化相違を念頭に置いたうえで、両文化圏には類似する表現も多い挨拶表現、呼称また敬語表現の中から、最も適切な訳語を選ぶことができる。また、筆者には日本語および日本文化

に関する知識があるため、色彩語彙、異文化要素、また著者の特有表現を更に適切に翻訳できる。これらに加え、擬音語擬態語、一・二人称、敬語表現、また文化要因のように、正確な訳語が存在しないカテゴリーにおいても、文脈にふさわしい手段を採用することにより、適切な訳ができたと考えられる。

翻訳では原著の生命が失われるだろうといわれる。特に重訳すなわち翻訳の場合には、さらに原著の生命が失われる恐れがある。外国語における文学作品の翻訳書を読む読者には、その外国語圏における特有の文化や原著の生命を知りたがっている人が多い。特に川端康成によって書かれた、原作の日本語においてさえも理解が簡単ではない文学作品の翻訳においては、言語としての日本語にとどまらず日本文化圏の知識が深い翻訳者こそがその生命を伝達できるだろう。同じ一つの文学作品の三言語での表現を対象とする本稿における分析から、これらの三言語それぞれの特異性と、その背景にある文化を考察することができた。その結果、筆者は文学研究ではなく翻訳研究でしか見出すことの出来ない単独性というのは、たしかにあるのだとの確信を持つに至った。

本研究は、このように三地域における言語・文化に精通した筆者の資質に立脚するものであり、だからこそ、これまでに述べてきた貴重な知見を得ることができた。現在、筆者は本稿で採り上げたカテゴリーに加えて、主語、終助詞、授受表現と複合語彙等についても重訳が及ぼす影響を分析する作業に着手している。今後は、さらに視野を拡げ、川端康成のような解釈が困難な文章を対象に言語論も組み込む研究に取り組みたいと考えている。